

三浦市間口洞窟出土の弥生式土器

神 沢 勇 一

一、序

三浦半島に於ける洞窟遺跡出土の弥生式土器研究の一環として、本稿では間口洞窟（また洞窟）遺跡出土の資料に就いて考察を行うこととした。

間口洞窟は神奈川県三浦市南下浦町松輪字間口にある小形の海蝕洞窟で、内部には鎌倉、平安、弥生各時代の三層の遺物包含層が堆積している。このうち弥生時代の包含層は多数の灰層を挿む厚さ九〇厘の混貝土層で、遺跡の主体をなし、その下部からは久ヶ原式土器、上部からは末期弥生式土器或は土師器と見られるものの出土が報告されている（註一）。しかし、今それ等を注意して見ると、下部出土土器には単に久ヶ原式土器のみを以ては説明出来ないものがあり、また上部出土土器も更にその型式を明瞭にする必要があると思われるので、先の結果を基礎として、ここに出土土器の分析を試みたいと考える。稿を起すに当って、終始御助言を賜った赤星直忠先生に深く感謝を捧げる次第である。

二、出土土器の分類

資料の総量はリング箱二個を充たす程度である。その大部分は特徴に乏しい小破片であるが、器形および部分の特徴から、壺形土器四類、甕形土器六類に細分できる。

壺形土器

第一類・外反する口縁部に粘土紐を貼付した厚い複合口縁をもつもの（3・4）。四個体ある。口には縄文と棒状隆起が、その下端には刻目がつけられるが、棒状隆起のない例もある。頸部は磨研の後、内外面共に丹彩される。同一個体の破片によれば、胴部は球状で、肩部に沈線の区劃のない縄文帯が数列めぐらされるが（15）、沈線を加えたものが一例ある（14）。

第二類・複合口縁の幅が広く、上部に平面をもつもの（1・2）。二個体ある。口頸部はやや内彎し、口縁には縄文と棒状隆起が、その下端に

は小さい刻目がつけられる。(1)は口縁上面にも縄文がある。器面は磨研の後、外面と口縁部内面に丹彩される。胴部は球状で、肩部に縄文をみるが文様構成は不明である。なお、縄文は第一類より細かい。

第三類・粘土紐を貼付した薄手の複合口縁をもつもの。(5)一例。口縁は角張り、その下端に連続した幅広の押捺をもつもの。全体の器形は明らかではない。

第四類・球状の胴の上に直斜した口辺部のつく小形土器で、いわゆる小形丸底土器と言われるものたぐいである。数例ある。

以上四類の土質は、第一類・第二類は粗で小石を多く含み、第三類・第四類は密である焼成は何れも良好で、後者の色調は黄褐色を示す。なおこの他に特殊な例として、黒色顔料で幅五纏前後の帯状の文様を縦に並行して描いた大形土器の胴部が一例ある。

甕形土器

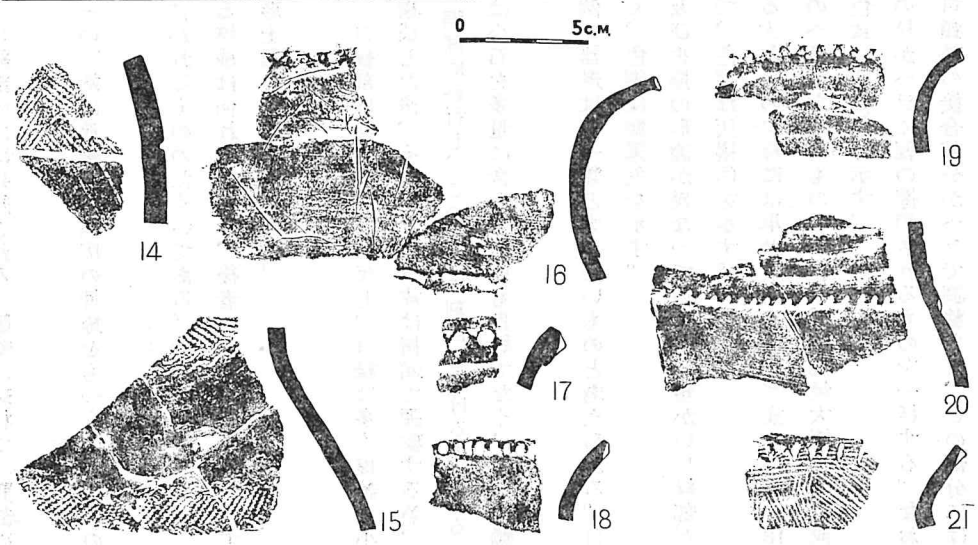
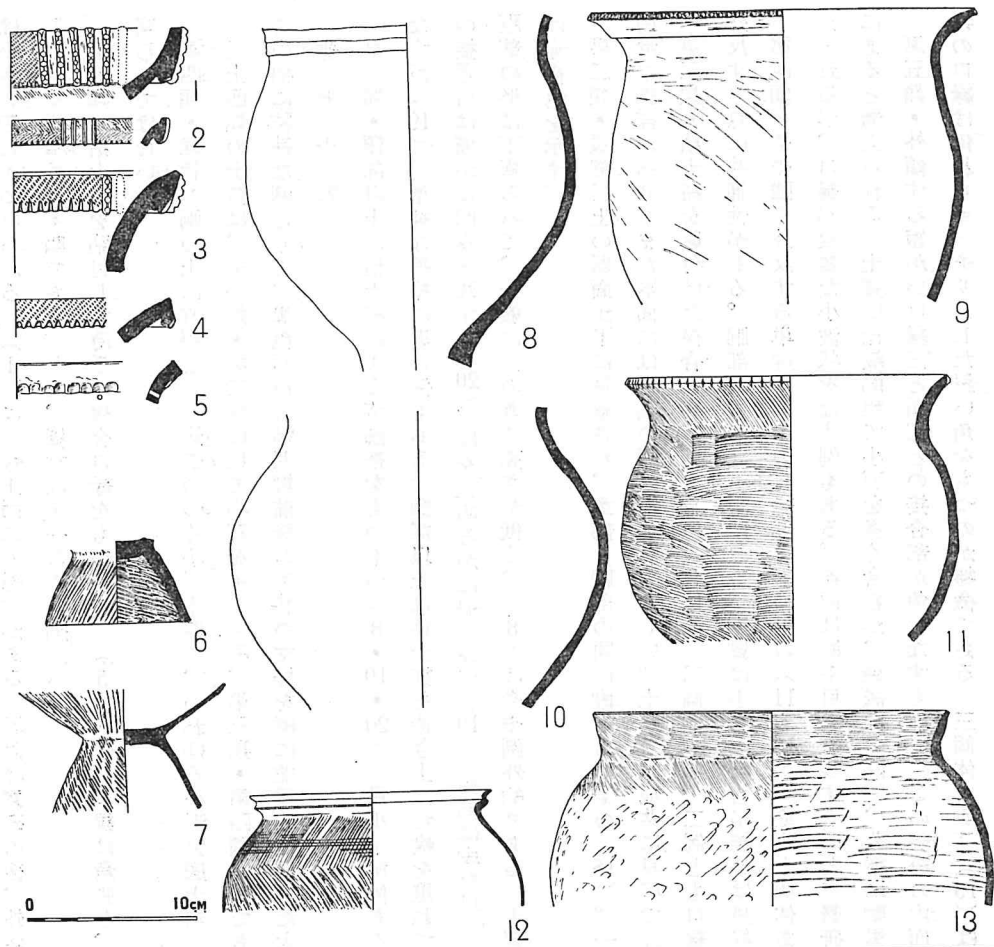
第一類・頸部以上に粘土紐による裝飾帯をもつもの(8・19・20)。最少十個体ある。口縁部はゆるやかに外反し、口縁は多く複雑な小波状をなすが(19)、単純な押捺に近い例もある。頸部以上は粘土紐を巻き上げた輪を重ねて構成した後、その上をヘラ或は指頭で調整する為、粘土紐の接ぎ目は僅かな凹みを残すか(20)、線を止めるかに過ぎない(19)。頸部は段を以って胴部に移行し、この部分に刻目をつける例もある(20)。胴部の形は下膨らみで、一般に幅の割に高さが低く、(8)はやや例外的である。土質は小石を多量に含み、焼成も良好でなく、色調は黝黒色或は赤褐色を示す。

第二類・頸部以上の器面が平に調整され、頸部と胴部の間に段をもつもの(16)。一例。器形は第一類と大差ないものと考えられる。口縁には凹形の押捺があり、また器面には調整の際の擦痕が著るしい。土質、焼成共に良好でなく、色調は黝黒色を示す。

第三類・粘土紐を貼付けた複合口縁をもつもの(9・17)。二個体ある。二例とも口縁及び押捺の形態が異なっているが、短かい口縁部が僅かに外反する点に共通性がある。胴部最大幅は下半にある。土質は小石を含むが焼成は良好で、色調は灰褐色を示す。

第四類・やや強く外反する単純で短かい口縁部をもつもの(11・18)。最少七個体ある大部分の口縁には単純な刻目(11)或は押捺(18)が加えられるが、口縁が複雑な小波状をなす例もある。器面は刷毛目文を残すものと、磨研のヘラ痕を残すものがある。胴部最大幅は中位或は下位にあると考えられる。土質は比較的粗で小石を多く含むが、焼成は良好で、色調は黝黒色或は灰褐色を示す。

第五類・外傾する短かい口縁部と頸部との接合部が角をなすもので、この部分の内面の稜がヘラで軽の擦消されるものを一括する。なお、この類の口縁は何れもキッチリとした鋭い角をもつのが特徴である。三個体ある。(13)は口頸部の接合部分がヘラで調整され、この部分には極めて細い刷毛目文を、胴部の外面にはヘラ痕、内面には擦痕を残している。器面は粗で凸凹が多く、土質、焼成共に不良で色調は灰褐色を示す。(21)



三浦市間口洞窟出土弥生式土器

は口縁部の内外面に強い刷毛目文をもち、口縁には鋭い刻目が加えられる。土質、焼成共に良好で、色調は淡褐色を示す。他の一例は極めて大形の土器の口縁部の破片であるが、右の二例と共通した特徴がみられる。口縁部の内外面には細かい刷毛目文を残す。外頂の口頸部の接合部分には指頭によるかの感をもつ幅広の浅い沈線が一本めぐっているが、これも接合部分の処理方法の一と考えられよう。

第六類・口縁部に段をもち、口縁部と頸部が強く屈曲するもの(12)。最少五個体ある。口縁部の器面は美しく調整され、頸部以下には鋭い刷毛目文がつけられているが、多少文様の的に施されている。器肉は薄く、土質は小石を多く含むが焼成は極めて良好で、色調は灰褐色を示す。

なお、以上各類の甕形土器の底部は一般に脚がつけられたものと考えられ、相当数の脚の破片が出土している。しかし、第六類の脚(7)を除いてはその分類は困難である。

三、考 察

間口洞窟遺跡出土の土器は二形態十類に細分出来たが、次にこれらの土器の出土位置をみると、壺形土器一、二類と甕形土器一、二、三、四各類は包含層の下半部から、壺形土器四類と甕形土器五、六類は上半部から主として出土したので、これらを下部出土土器、上部出土土器と大別して考察を進めてゆきたいと考える。

下部出土土器

かつて久ヶ原式土器に比定されたものであるが、今これを検討すると、一応久ヶ原式土器の特徴を示すものは壺形土器一類、甕形土器一、三類だけである。しかし、これらの土器をみると壺形土器には沈線で区劃された山形文を欠き、甕形土器も粘土紐による裝飾帯が全く退化しており、更に器形も最大幅を胴部下半にもつ下膨らみ状をとるなど、久ヶ原式土器とするより、むしろ弥生町式土器への過渡的形態を示している。なお、甕形土器の二、三類はこれに伴う可能性が高い。次に下部出土の土器、即ち壺形土器一類と甕形土器四類については良好な資料に恵まれないが、それらが示す特徴は明らかに弥生町式土器に比定されるべきものであって、この結果、下部出土土器には二型式の存在が知られる。

上部出土土器

かつて弥生式末期或は古墳前期の土器と考定されたもので、壺形土器四類、甕形土器五、六類であるが、これらはその特徴から前野町式土器に比定されるべきものと考えられる。しかし、甕形土器六類の様な土器は従来は前野町式土器の一形態とされて来たものであるが、最近、和泉式土器以前の土器の検討が進められるに従って前野町式土器から分離され、同式の次に位置づけられる可能性が高いものであり、また甕形土器の五類は同じ前野町式土器であっても「く」の字形に鋭く屈曲した口頸部内面に稜をもつものと較べると、殊更に接合部の稜を擦消しており、更に口縁

部の傾斜が少ない等、更に検討すべき余地を残すものである。しかしながら、現在の資料では問題の解決は困難であるので、一応注意しておくに止めたい。なお、出土位置の不明な壺形土器三類はその形態からみて、上部出土器の中に含まれるべきものであろう。

以上によって間口洞窟出土土器には久ヶ原、弥生町、前野町の三型式が認定されたが、次にこれら諸型式の形態の組成を見ると、後期弥生式土器には一般に壺形・甕形・鉢形・高坏形・坏形の諸形態が見られるのに反して、壺形・甕形の二形態のみみられるに過ぎない。この点は昆沙門B洞窟遺跡の場合と同様であって、地域差よりも生活形態の差を考慮する必要があると考えられる（註2）。

四、結 語

間口洞窟出土の弥生式土器は三群に分類出来、それぞれ久ヶ原式土器、弥生町式土器、前野町式土器に比定される。しかし、このうち久ヶ原式土器に比定されるものは、厳密には弥生町式土器への過渡的な形を示すものであるが、これらが単に過渡的存在として処理されるべきか否かは、考慮の余地がある様に思われる。また前野町式土器に比定されるものうち、甕形土器六類は前野町式土器から分離される可能性をもつ土器であるが、本遺跡においては壺形土器四類、甕形土器五類との間に層位的上下関係をもつて出土した形跡はない。しかし、今後の問題として、前者と後者——特に甕形土器五類——がどの様な関係にあるかを注意したい。

最後に各型式の組成の特異性に就いては、本遺跡居住者の漁撈という生活形態に原因するものと考ええる。

(註) 1 赤星直忠「海蝕洞窟——三浦半島に於ける弥生式遺跡——」神奈川県文化財調査報告第二十集（一九五三年）

2 神沢勇一「三浦市昆沙門B洞窟出土の弥生式土器」横須賀市博物館研究報告第2号（一九五八年）